
「第6回特発性心室細動研究会」特集号の発行にあたって

特発性心室細動研究会(J-IVFS)代表幹事 平岡昌和
(東京医科歯科大学名誉教授・労働保険審査会)

特発性心室細動研究会(J-IVFS)は、発足後6年を経過したものである。この研究会はBrugada症候群を含む特発性心室細動の日本における病態の特徴とその突然死予防の対策を解明するために、全国の施設の協力を得て、調査・共同研究を行っている。そして、毎年研究会を開催し、調査結果の報告と共通のテーマについて、それぞれの施設での経験、研究成果などを持ち寄り、情報を交換してより正しい特発性心室細動の病態解明に努めている。本号は、平成20年2月16日に開催された第6回特発性心室細動研究会(J-IVFS)での発表内容をまとめたものである。

今回は二つのセッションを開催し、セッション1「冠攣縮性狭心症を合併したBrugada症候群の特徴—頻度、治療およびその予後—」とセッション2「無症候性Brugada症候群または失神例におけるICD適応とその予後」について、各施設からの発表と討議が行われた。セッション1では、冠攣縮性狭心症とBrugada症候群とは合併する例が認められ、いずれも迷走神経刺激状態で誘発されやすいことなど、病因・病態に共通するところが多いと指摘されている。今回の報告でも両者の合併や病因を共有する傾向を示す報告が多くなされたが、単に両者が日本人に多発するだけとする報告もあり、非常に注目された。セッション2については、日常臨床において常に判断に困り、対応が別れる問題であり、各施設での対応が披露され活発な議論をよんだ。その他に、事務局報告として、これまでの本研究会での調査に基づき「Brugada症候群症例の臨床経過および全国アンケート調査について」約250例近いBrugada症候群症例の臨床的特徴と平均4年間の経過観察からの予後予測因子についての結果、および「Brugada症候群におけるEPSに関するアンケート調査結果の報告—Brugada症候群に対するEPS施行結果とICD適応について—」に関する興味ある結果が報告された。

それぞれの発表および調査結果は大変関心の深い問題であり、本特集号が研究会参加者のみならず、この病態に関心を有する方々にも必ずや有意義な情報となるものと確信している。

平成20年10月